

鳴門市の板碑

考古班 (徳島考古学研究グループ)

岡山真知子^{1*} 西本 沙織² 小林 勝美³ 三宅 良明² 福田 宰大⁴

要旨：鳴門市には、特徴的な板碑が造立されている。今回の調査で7基の板碑、紀年銘板碑2基を確認できた。鳴門市の板碑の大きな特徴は、大麻町辻見堂の^{みょうごう}名号板碑と、大麻町東林院と宝幢寺の地蔵画像板碑に見ることができる。また、阿波型板碑の最も多い種子である阿弥陀三尊板碑が見られないことも特徴である。辻見堂の名号板碑は阿波型板碑では2番目に古く、美しい文字の痕跡が残る。地蔵画像板碑は、画像の特徴が対照的な2基である。数的には少ないが、他地域とは異なる特徴が見いだせた板碑である。

キーワード：阿波型板碑、名号板碑、地蔵画像板碑、阿弥陀画像板碑

1. はじめに

板碑とは、中世に造立された石製の卒塔婆のことで、分布の中心地の一つに阿波国があるという独特の考古遺物である。鳴門市の板碑は、『鳴門市史』(鳴門市1967)に9基紹介されたのが初めてである。『日本の石仏2』(溝淵1983)に、辻見堂・東林院・宝幢寺の板碑が紹介されているが、特に宝幢寺の地蔵画像板碑は初出であり、注目させられた。

今回調査した板碑は、7基の板碑である。『鳴門市史』に紹介された板碑のうち3基は確認できなかったが、今回、新たに1基の板碑を調査した。それは、前述した宝幢寺の地蔵画像板碑である。筆者らは過去に何度かこの板碑について照会したことがあったが、今までは所在不明であった。今回、宝幢寺のご協力により調査できたことは大きな成果と言えるだろう。今回確認できた板碑を表1に集成し、地図上に記したのが図1である。

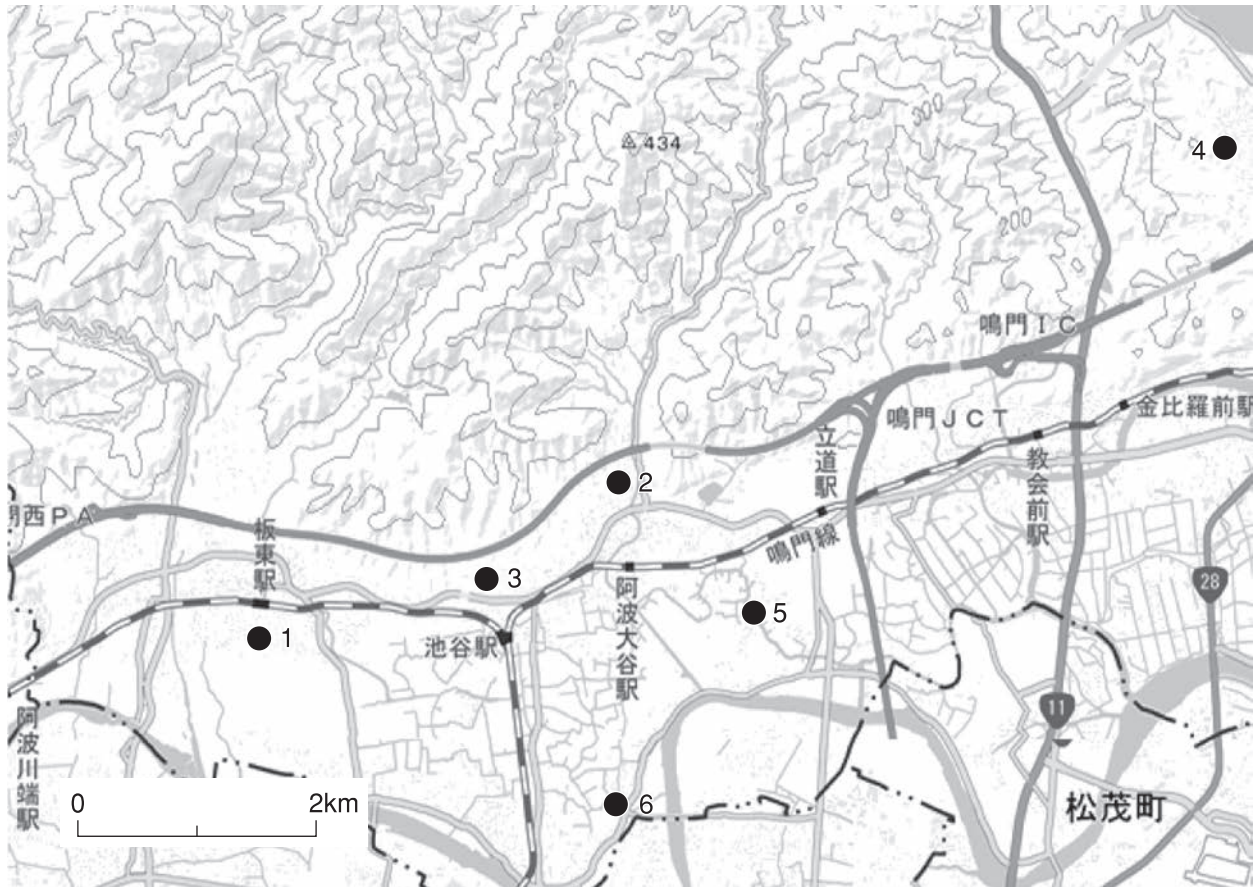
表1 鳴門市の板碑一覧(長さ・幅・厚さの単位はcm, 番号は図1・図2・図4・図5に同じ)

| No. | 所在地 | 長さ | 幅 | 厚さ | 形 | 二線 | 粹線 | 標識 | 銘文 | 西暦 | 文献 |
|-----|----------------------|-------|------|-----|----|----|----|-------|---------------------|------|--------|
| 1 | 鳴門市大麻町板東 辻見堂 | 113.2 | 47.5 | 3.7 | 山形 | 有 | 有 | 名号 | 正和四年乙卯七月 □□□ | 1315 | 鳴門市史 |
| 2 | 鳴門市大麻町大谷 東林院本殿内 | 65.5 | 29.5 | 4.5 | 山形 | 有 | 有 | 地蔵画像 | □□□逆修也 永 禄二年二月九日 | 1559 | 鳴門市史 |
| 3 | 鳴門市大麻町池ノ谷長田103 宝幢寺 | 54.2 | 14.0 | 5.0 | 山形 | 無 | 無 | 地蔵画像 | | | 日本の石仏2 |
| 4 | 鳴門市撫養町黒崎字磯崎85 西光寺 | 98.5 | 40.0 | 4.8 | 山形 | 有 | 有 | 阿弥陀画像 | | | 鳴門市史 |
| 5-1 | 鳴門市大麻町牛屋島字中北43-2 宝光寺 | 115.5 | 48.0 | 5.0 | 山形 | 有 | 有 | 不明 | | | 鳴門市史 |
| 5-2 | 鳴門市大麻町牛屋島字中北43-2 宝光寺 | 106.5 | 40.0 | 7.0 | 山形 | 有 | 有 | 名号 | | | 鳴門市史 |
| 6 | 鳴門市大麻町西馬詰字杉堂15-2 長泉寺 | 91.5 | 49.2 | 7.5 | 山形 | 有 | 有 | 阿弥陀画像 | | | 鳴門市史 |

1 徳島市南末広町 2 徳島市教育委員会社会教育課 3 小松島市江田町 4 徳島市立八万南小学校

* 770-0865 徳島市南末広町4-31-901 088-622-3019

鳴門市の板碑分布



鳴門市の板碑分布 大麻町中心



図1 鳴門市における板碑の所在 (番号は表1に同じ)

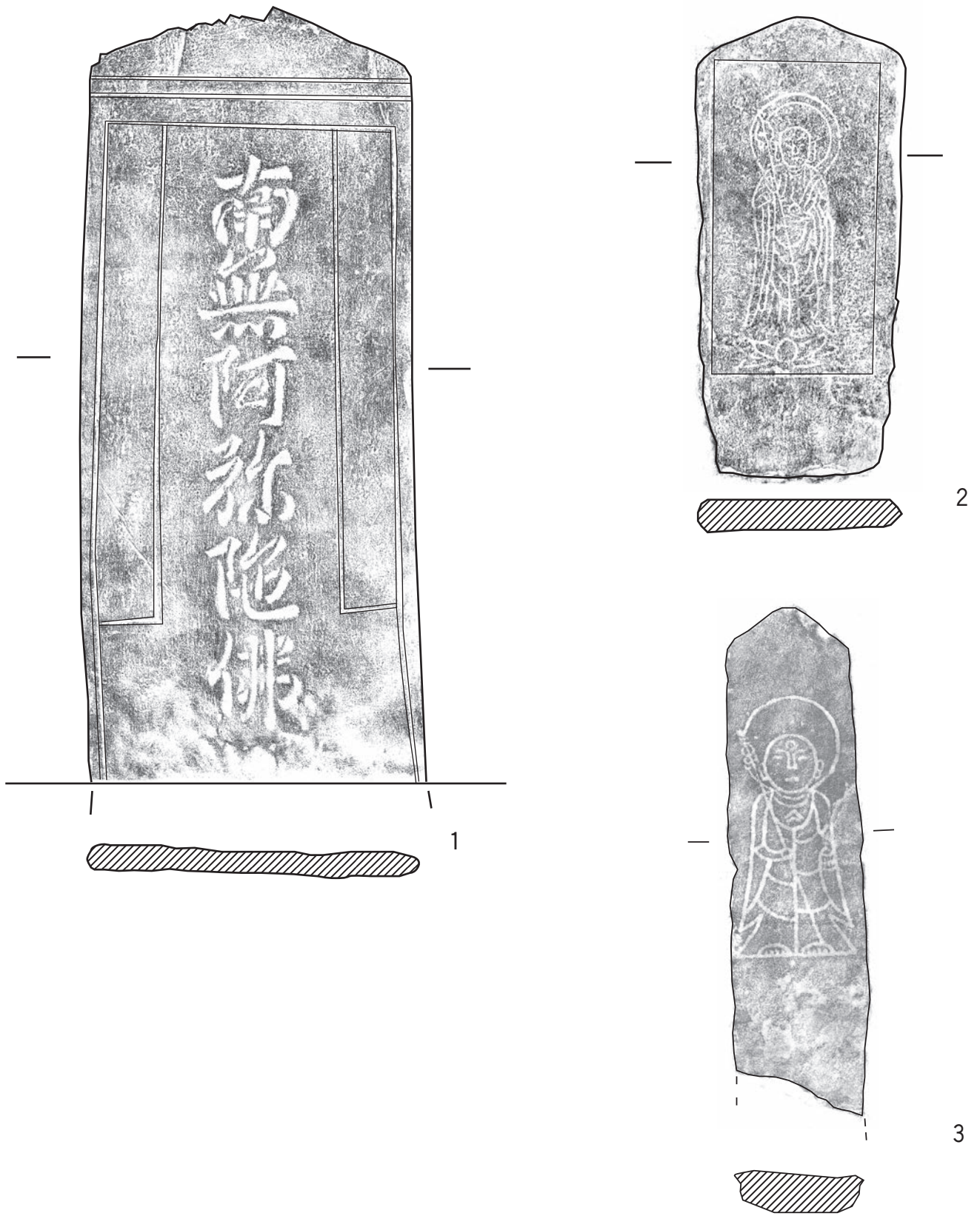


図2 鳴門市板碑実測図 No.1 (1・2は1:8, 3は1:6)

2. 鳴門市における板碑の調査

今回の調査は確認した6カ所、7基の板碑の実測調査・拓本・写真撮影を行った。

1) 辻見堂の板碑（図2—1）

大麻町板東のJR板東駅の南方に位置するのが辻見堂の名号板碑である。長さ113.2cm・幅47.5cm・厚さ3.7cmを測る。「正和四年乙卯七月□□□」の銘文を持つ。正和4年は西暦1315年である。力強く蓮華座の上に「南無阿弥陀佛」と整った楷書体で彫られており、美しい名号板碑である。また、枠線の内側に銘文を枠で囲む区画をもつのが特徴で、区画の下に花瓶を描いている。阿波における名号板碑では、石井町の敷地神社の1289年に次いで古い板

碑である。現在は、固定するために蓮華座から下が埋められており、実際の大きさは不明であるが、『鳴門市史』では、135cmと記述されており、これがこの板碑の大きさであろう。また、『日本の石仏2』に所収されている写真（図3）からもその姿がうかがえる。



図3 辻見堂板碑写真（溝淵1983）

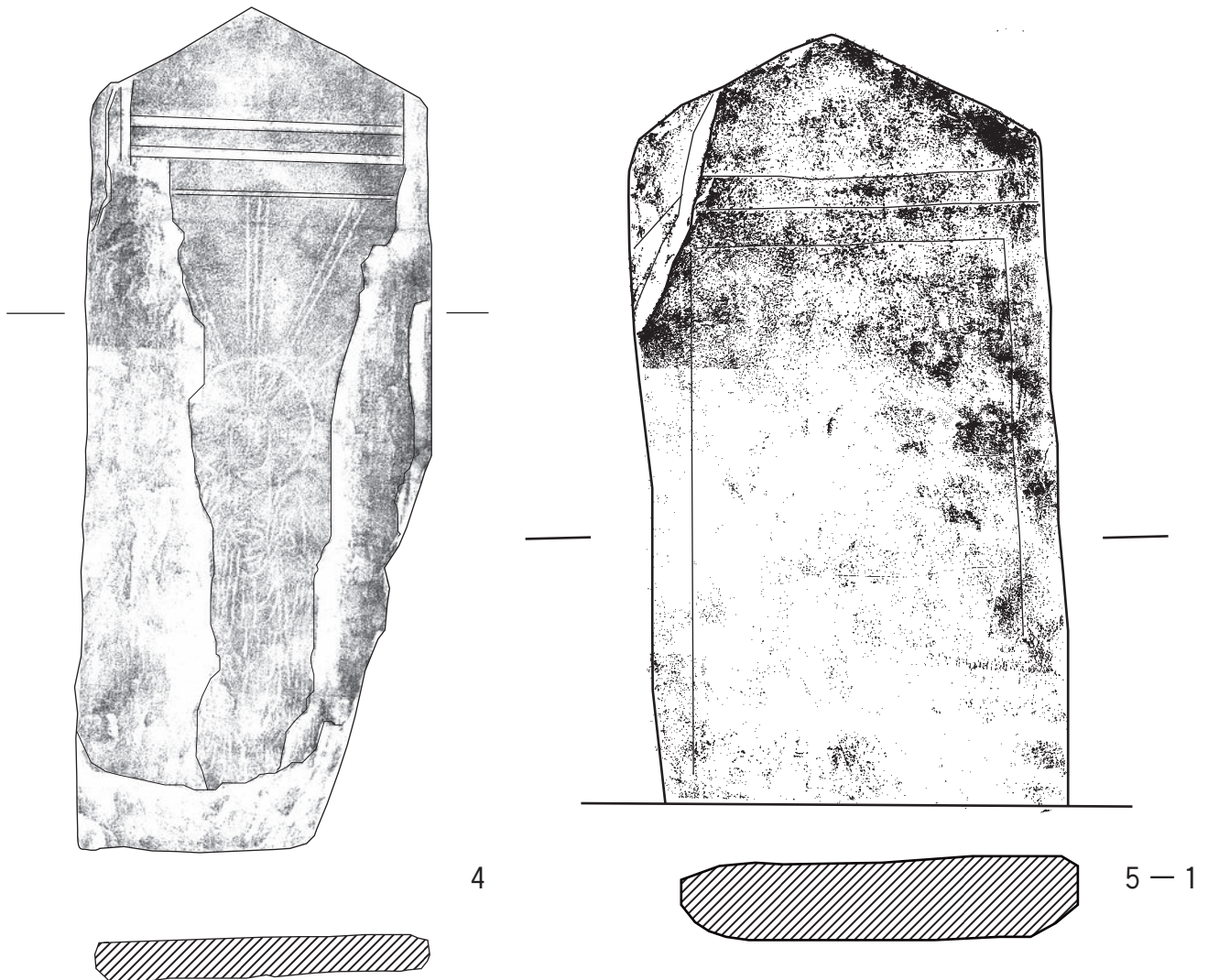


図4 鳴門市板碑実測図 No.2 (1:8)

2) 東林院の地藏画像板碑 (図2-1)

東林院に保管されていた地藏画像板碑で、長さ65.2cm・幅29.5cm・厚さ4.5cmを測る。頭部山形だが、二線は持たず、枠線をもつ小型の板碑である。もとは、穴観音古墳の中にあつた板碑のようである。像の左右に、「□□□逆修也 永禄二年二月九日」の銘文があり、中央に地藏が線刻で描かれている。1559年は室町時代の後期に当たる。

『鳴門市史』には、東林院にはもう一回り大きい地藏画像板碑が1基あると記載されているが、今回は所在を確認できなかった。

3) 宝幢寺の地藏画像板碑 (図2-3)

宝幢寺に収蔵されていた地藏画像板碑である。長さ54.2cm・幅14.0cm・厚さ5.0cmを測る板碑で、

頭部山形で、二線・枠線をもたない。今回の調査では唯一の砂岩の板碑で、中央部に簡略な線で地藏を描いている。

4) 西光寺の板碑 (図4-4)

黒崎にある西光寺の入り口に建てられている板碑である。長さ98.5cm、幅40.0cm、厚さ4.8cmを測る阿弥陀画像板碑である。頭部山形で、二線・枠線をもち、中央部に光背・後光をもつ阿弥陀画像が線刻で描かれている。銘文はもたない。両端の表面が剥離している。

5) 宝光寺の板碑 (図5-5-1・2)

大麻町牛屋島の宝光寺入口に2基の板碑が建てられている。いずれもセメントの中に埋め込まれているので本来はもっと大きいものである。5-1は、表

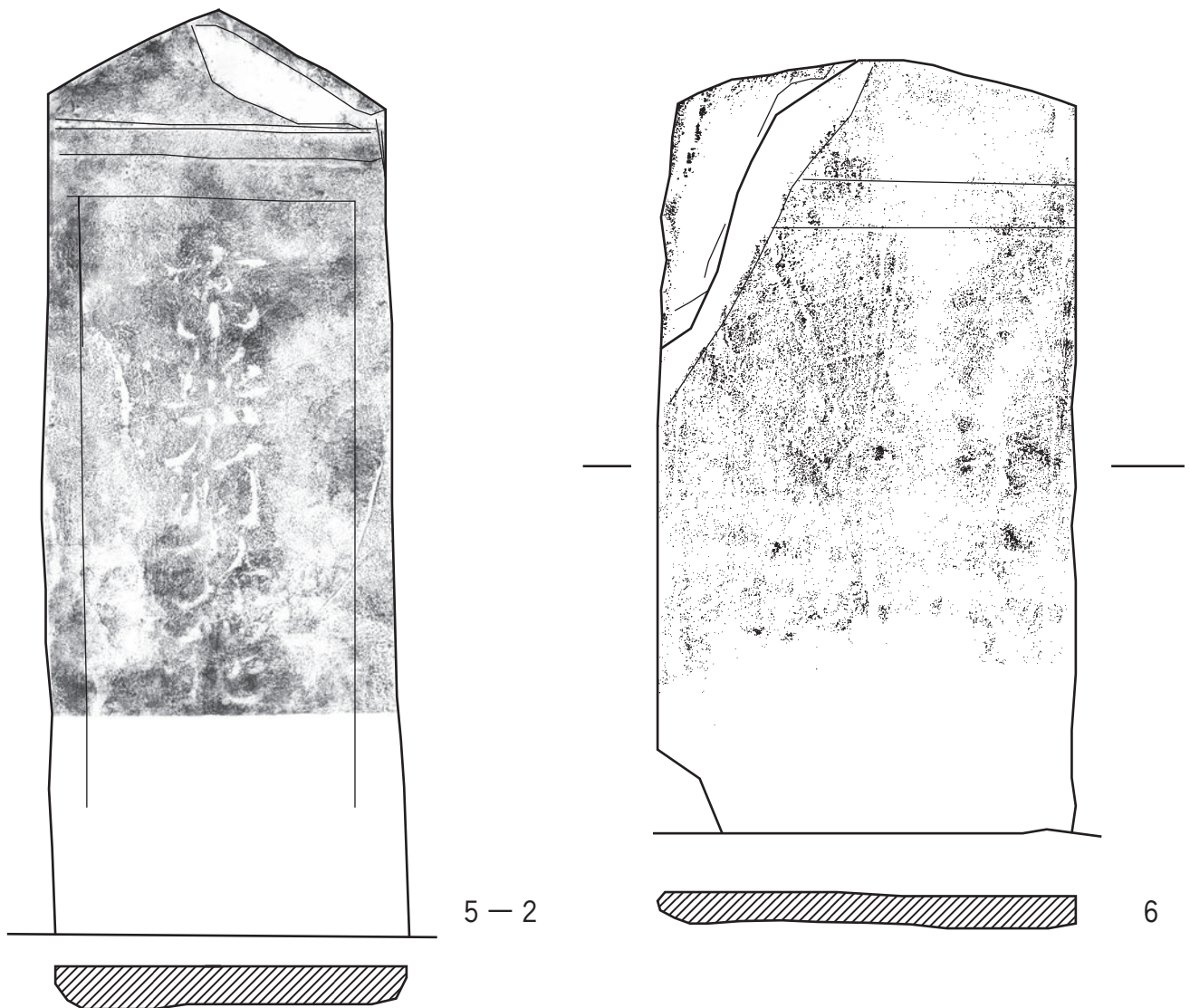


図5 鳴門市板碑実測図 No.2 (1:8)

面の摩滅が激しいが、何かの画像である可能性が高い。長さ115.5cm・幅48.0cm・厚さ5.0cmを測る。5-2は、名号板碑である。頭部山形で、二線・枠線をもつ。中央部に「南無阿弥陀」と行書体で刻まれている。銘文は確認できないが、名号の描き方から南北朝期と考えられる。

6) 長泉寺の板碑 (図5—6)

大麻町西馬詰の長泉寺に建てられている板碑である。長さ91.5cm, 幅49.2cm, 厚さ7.5cmを測る阿弥陀画像板碑である。頭部山形で、二線・枠線を持ち、中央部に光背・後光をもつ阿弥陀画像が線刻で描かれている。阿弥陀画像の上半部しか確認できなかった。銘文は確認できない。

3. まとめ

1) 板碑の標識

鳴門市の板碑を標識別にグラフにしたのが図6である。名号・地蔵画像・阿弥陀画像が各2基で、不明1基である。『鳴門市史』記載の板碑がすべて存在していたとしても、一般的な阿波型板碑では阿弥陀三尊種子板碑が約56%を占めるのに対して、鳴門市ではわずか1基しかない。

これが、当時の信仰との関係を示すものか、今後課題としたい。

2) 板碑の造立年代

紀年銘板碑が2基しかないが、最も古い正和4(1315)年の辻見堂の名号板碑と、永禄2(1559)年の東林院の地蔵画像板碑である。2基の間に250年という年代差があり、銘文を持たない他の板碑が

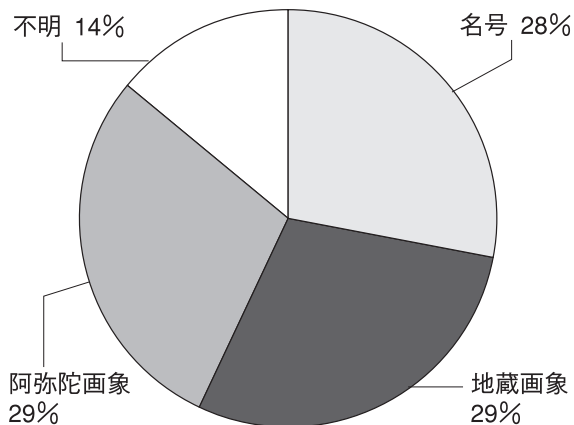


図6 鳴門市板碑の標識割合

その間を埋めるのか、興味深い。

3) 板碑の大きさ

鳴門市の板碑の大きさの分布を図7に示した。長さについては下半部が深く埋まっている板碑については『鳴門市史』のデータを利用した。特徴として、小型板碑が多いことが挙げられる。

また、阿波型板碑の場合は幅と長さの比が1:2が標準的であるが、鳴門市の板碑は2基の板碑はほぼそのラインにあるが、他の板碑は幅が狭く、1:3に近くなっている。他と比べて、幅の狭い傾向が指摘できる。

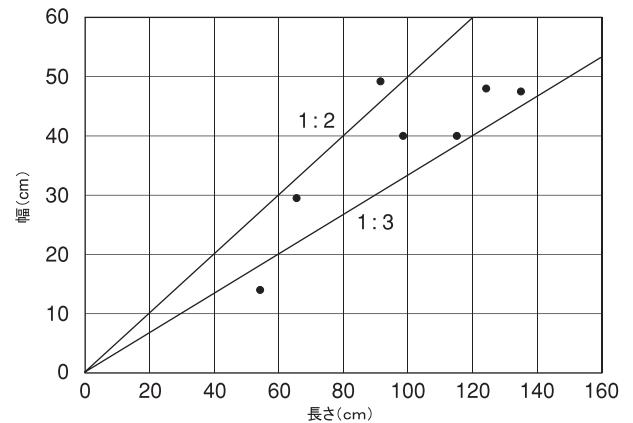


図7 鳴門市の板碑の大きさ

4. 考察

1) 名号板碑

「南無阿弥陀仏」のいわゆる六字名号が刻まれた名号板碑は阿波の板碑全体の約6%を占め、種子・画像板碑に次いで多いことがこれまでの研究で示されている(考古班1997)。今回の調査で2基の名号板碑を調査した。1基は、美しい楷書体で描かれており、鳴門市で最も古い正和4(1315)年という鎌倉時代の年号をもつ辻見堂の板碑である。もう1基は今回確認された宝光寺の板碑で、行書体で名号が描かれている。紀年銘はなく、南北朝期から室町時代と考えられる。

阿波型板碑で、名号板碑で年号のわかるものが21基ある。正応2(1289)年を初出とし、永正2(1505)年が最後となる。1423年～1493年の70年間の紀年銘板碑は見つかっていない(図8)。

名号板碑の分布をみると、徳島市に38基、石井町に53基と吉野川下流域および鮎喰川流域に特に

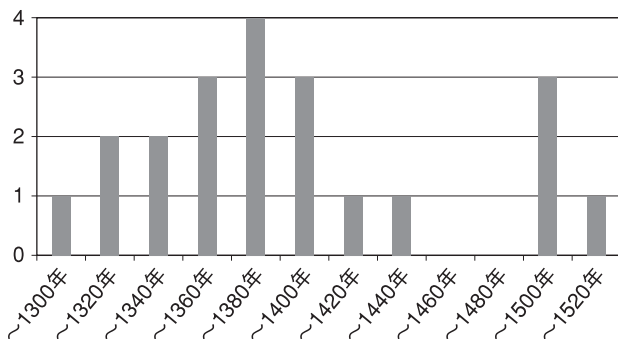


図8 名号板碑の年代別造立数

集中しており、阿波における初期段階（鎌倉時代）の板碑や大型の凝灰岩製の五輪塔の分布圏ともほぼ重なっている。これらの分布域は古代の国府推定地にも近いほか、中世の守護佐々木氏や小笠原氏などにゆかりが深い地域でもある。

徳島県内における名号板碑の発生は全国的に見ても古く、石井町高川原加茂野敷地神社の正応2（1289）年の板碑（県指定文化財）が、埼玉県行田市真名板薬師堂の建治元（1275）年の板碑に次いで古い（石村 1984）。加茂野の板碑は六字名号を記した札を配り全国を歩いた一遍上人が阿波を遊行し、その後亡くなった正応2年に建立されたものであり、一遍上人との関連を示唆している。次に、建てられた名号板碑が鳴門市の辻見堂の名号板碑である。加茂野の板碑以降、26年経過している。これ以降14世紀には吉野川下流域を中心に多くの名号板碑が建てられるようになるが、15世紀に入ると急激に見られなくなり、1423年～1493年の70年間、紀年銘板碑は見つかっていない。

前述したように、辻見堂の名号板碑は、徳島県で2番目に古い名号板碑である。一遍上人が鳴門・淡路を経由して、神戸に行く行程に当たる可能性もあり、一遍の信仰が当地に広まったことが建立の背景にあるのかもしれない。

2) 地蔵画像板碑

今回、2基の地蔵画像板碑の調査をした。1基は東林院の紀年銘板碑で、永禄2（1559）年の年号を持つ緑色片岩製である。もう1基は、宝幢寺の銘文を持たない砂岩製であり、この2基が対照的である。同様の状況が旧・日和佐町（現・美波町）でもみられる。考古班1997でも述べたが、鳴門市の前者に当たるのが赤松字栗作の青木家の地蔵画像板碑であ

る。後者に当たるのが西河内字月輪の西河内月輪の板碑である。

旧・日和佐町青木家の板碑は、保存状態のよい双式板碑で、2基とも緑色片岩製である。1号板碑は中央に蓮華を挿した水瓶をもつ観音像を線刻した板碑で、長さ67.7cm・幅18.0cm・厚さ2.5cmを測る、ほぼ完形の板碑である。左下には「明徳三年二月廿三日」、右下に「性榴門也」と刻まれている。2号板碑は中央に錫杖をもった地蔵像を線刻した板碑で、長さ65.3cm・幅18.0cm・厚さ2.5cmを測る、ほぼ完形の板碑である。「明徳三年二月廿三日」、右下に「妙榴尼也」と刻まれている。非常に精巧な線刻表現がとられている双式板碑である。

これに対して、西河内月輪の板碑は砂岩製で、地蔵の線刻像を種子とするが、二線も枠線ももたない。1号板碑は、長さ98.0cm・幅15.0cm・厚さ6.0cmを測り、長幅比が15.3%しかない細長いものである。2号板碑は、長さ80.0cm・幅16.7cm・厚さ5.0cmを測り、長幅比は20.8%である。

前者の青木家の板碑は、赤松川沿いにあり、この川を遡れば、那賀町相生に出る道沿いである。旧・相生町では確認した30基の板碑のうち、砂岩製が4基、緑色片岩製が26基である。旧・日和佐町は、地質的には秩父帯に属し、砂岩と泥岩の互層から成っており、砂岩石材の入手はたやすい。これに対して緑色片岩は、鮎喰川流域まで行かないと入手できない。しかも、緑色片岩製の板碑は総じて種子や線刻が精巧で美しいものが多い。特に、青木家の双式板碑は非常に精巧な線刻表現がとられており、これらの点から、この地域で製作したものと考えられるよりも、緑色片岩板碑製作の盛んな鮎喰川流域からの搬入と考える方が妥当であろう。

以上から、青木家の板碑は鮎喰川流域などの地域からの搬入と考えられ、西河内月輪の板碑は地元周辺で製作されたため、線刻表現が稚拙なのではないかと考えられる。また、海部郡海陽町大字芝字野江地蔵寺の地蔵画像板碑の線刻の意匠と共通性が認められる。ただし、この地蔵画像板碑は明徳元（1390）年の紀年銘を持つ。海陽町宍喰や高知県東洋町甲浦にも同様のものが確認される（図11, 12）。

ここで、鳴門市の地蔵画像板碑について考えたい。



1289年
(石井1974)



1315年
(今回調査)



1337年
(徳島市1989)



1348年
(徳島市1989)



1373年
(坂田1997)



1393年
(徳島市1989)



1394年
(徳島市1989)

図9 徳島県におけるおもな名号板碑

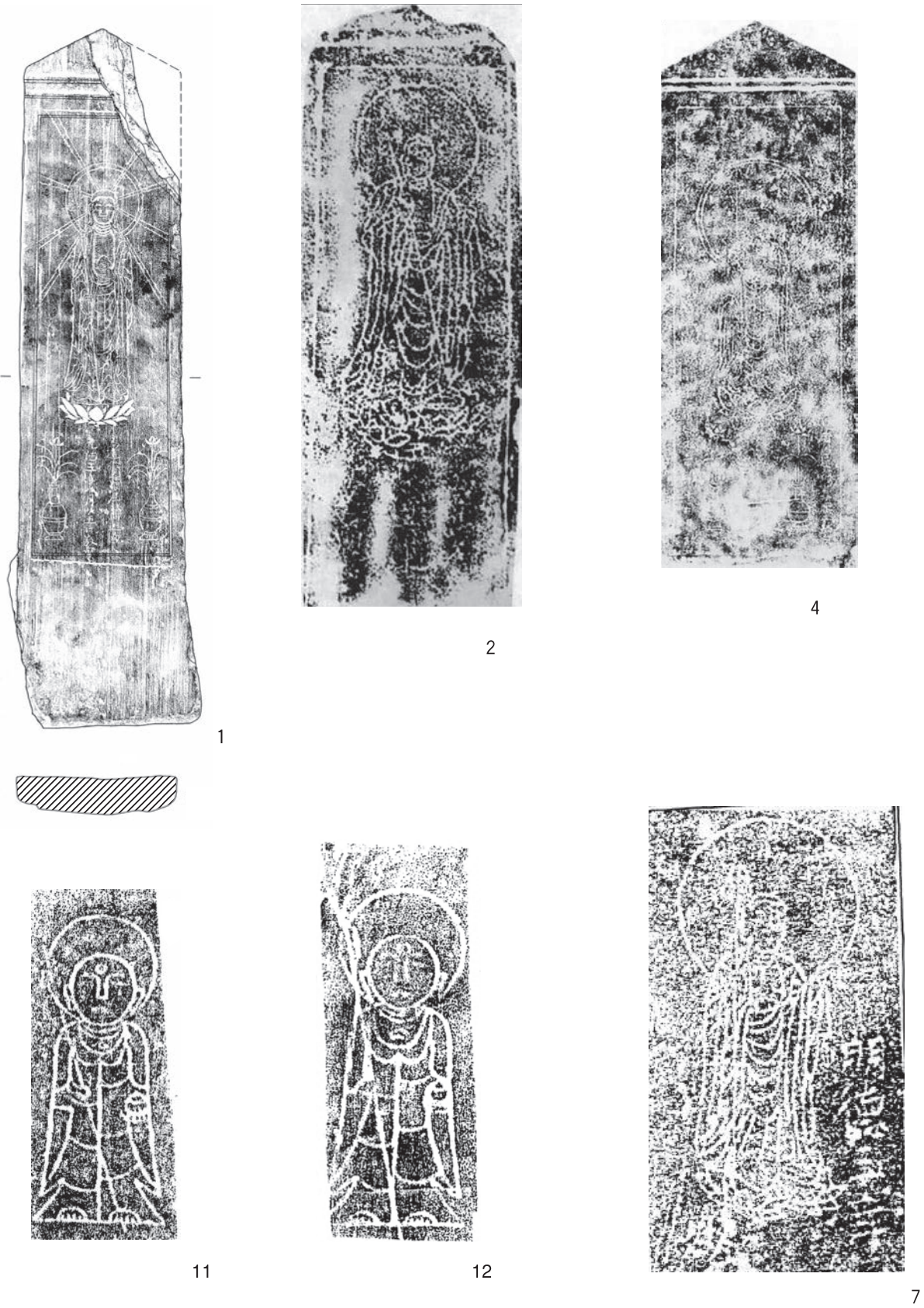


図10 おもな地藏画像板碑 (番号は表2に同じ)



図 11 穴喰の地蔵画像板碑（筆者撮影）



図 12 甲浦の地蔵画像板碑（筆者撮影）

表 2 おもな地蔵画像板碑の分布（単位 cm）

| No. | 西暦 | 全長 | 幅 | 厚さ | 所在地 | | 出典 |
|-----|------|------|------|-----|---------------------|------|----------|
| 1 | 1331 | 113 | 25 | 5 | 名東郡佐那河内村仁井田 | 緑色片岩 | 考古班 2002 |
| 2 | 1339 | 106 | 24 | 5 | 名西郡神山町神領字大埜地 | 緑色片岩 | 神山町 1983 |
| 3 | 1390 | 135 | 45 | 6 | 徳島市入田町堀田 地藏堂 | 緑色片岩 | 徳島市 1989 |
| 4 | 1390 | 158 | 44 | 5 | 名西郡神山町広野字馬地 地藏堂 | 緑色片岩 | 神山町 1983 |
| 5 | 1390 | 174 | 45 | 5.5 | 名西郡神山町広野字嫁河内墓地 | 緑色片岩 | 神山町 1983 |
| 6 | 1390 | 140 | 38 | 7 | 海部郡海陽町大字芝字野江地藏寺 | 緑色片岩 | 海部町 1971 |
| 7 | 1392 | 64 | 17 | 2.8 | 海部郡美波町赤松字栗作 青木佐喜太郎宅 | 緑色片岩 | 考古班 1997 |
| 8 | 1393 | 100 | 30 | 4 | 那賀郡那賀町中山 森家地藏堂 | 緑色片岩 | 徳島県 1997 |
| 9 | 1404 | | | | 吉野川市川島町学 御迦藍堂 | 緑色片岩 | 徳島県 1997 |
| 10 | 1559 | 65.2 | 29.5 | 4.5 | 鳴門市大麻町池谷 東林院本殿内 | 緑色片岩 | 今回 |
| 11 | | 80 | 16.7 | 5 | 海部郡美波町西河内月輪 | 砂岩 | 考古班 1997 |
| 12 | | 98 | 15 | 6 | 海部郡美波町西河内月輪 | 砂岩 | 考古班 1997 |

東林院の地蔵画像板碑は、神山町神領字^{おおのち}大埜地例に近い、阿波では比較的オーソドックスな構図の線刻画像である。紀年銘は永禄2（1559）年の逆修板碑である。この板碑は、鮎喰川流域から搬入されたと考えられる。

これに対して、宝幢寺の地蔵画像板碑は銘文を持たない砂岩製である。ただし、この砂岩は、赤茶色っぽい色を呈しており、地元鳴門の撫養石^{むや}とは考えられない。これと同じ砂岩でつくられ、同じ意匠の地蔵画像板碑が前述した旧・日和佐町や海陽町穴喰、高知県東洋町甲浦にある（図 11, 12）。この砂岩は穴喰から室戸にかけて産出する砂岩で、板碑も地元

周辺でつくられたと考えられる。この板碑と宝幢寺の地蔵画像板碑は非常に共通性が高い。以上から、穴喰や高知県東洋町周辺から搬入されたと考えられる。

県内で地蔵の画像・種子が刻まれた板碑は、全体の中で4%程度見られる。紀年銘板碑に限ると、現在のところ10基知られる（表2・図10、考古班2002）。

表2に示したとおり、地蔵画像板碑では、仁井田神社地蔵画像板碑が最も古い例である。また、1390～1393年には、入田町から神山町の鮎喰川流域で3基、那賀町から海陽町の県南部で3基の計6基が造立されたことは注目される。特に、板碑の造立数

そのものが少ない県南部で短期間に地蔵画像板碑が造立されたことは、板碑と信仰との関わりを考える上でも意義深い。

参考文献

- 石井町 2004：『石井町の板碑』石井町教育委員会
- 石村喜英 1984「題目・名号・十三仏板碑」『板碑の総合研究 総論』柏書房
- 小沢国平 1967：『板碑入門』隣人社
- 越智通敏 1979：「阿波路の一遍—「一遍聖絵」の空白部分—」『伊予史談』231・232 合併号
- 海部町 1971：『海部町史』海部町教育委員会
- 神山町 1983：『神山の板碑』神山町教育委員会
- 神山町 1985：『神山の板碑（第二集）』神山町教育委員会
- 考古班 1997：「日和佐町の板碑」『総合学術調査報告 日和佐町』阿波学会紀要 43号
- 考古班 2002：「佐那河内村の板碑」『総合学術調査報告 佐那河内村』阿波学会紀要 48号
- 坂田磨耶子 1997：「徳島県の名号板碑」『歴史考古学』41号
- 田所市太 1916：「阿波南方の板碑」『考古学雑誌』6巻7号
- 田所市太 1917：「阿波國海部郡穴喰の板碑」『考古学雑誌』7巻6号
- 徳島県教育委員会 1977：『石造文化財—徳島県文化財 基礎調査報告書第1集—』
- 徳島市 1989：『徳島市の石造文化財』徳島市教育委員会
- 鳴門市 1967：『鳴門市史』上巻，鳴門市教育委員会
- 服部清道 1972：『板碑概説』角川書店
- 溝淵 1983：溝淵和幸『日本の石仏2』国書刊行会

"Itabi" the flattened schist stone-monuments in Naruto City, Tokushima, Japan

OKAYAMA Machiko*, NISHIMOTO Saori, KOBAYASHI Katsumi, MIYAKE Yoshiaki and FUKUDA Osahiro.

* 4-31-901, Minamisuehiro-cho, Tokushima 770-0865, JAPAN

Proceedings of Awagakkai, No.61 (2017), pp.113 – 123.

